

氏名	椎野 倫奈
ヨミガナ	シイノ リナ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第665号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 囲いの森－有機の形と色－ 〈作品〉 杜の径 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	植田 一穂
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	海老 洋
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文は、森をモチーフとした囲いの空間を、有機的な形と色による抽象と具象の中間表現として描き出そうとしている、筆者の創作論を論述したものである。

ここで言う囲いとは、周りをふさいで囲むのではなく、進む方向を定める境界としての役割を持ち、径や神社の鳥居を暗喩している。そして自作品での鳥居とは、神域と人間が住む俗界を区画する結界の意味ではなく、通過する空間である。また、ここでの有機的な形と色とは、有機野菜などの有機ではなく、「人工物には無い自然物による複雑な表情」を意味する。ドローイングして得た森の複雑な形象を、通過する概念上の鳥居として再構成し、そこに岩絵具による偶発的な質感も交え、抽象と具象の間を行き来する制作過程を言語化したいと思う。

以下に、3章からなる本論文の章立てを述べた。

第1章「囲いの森」

第1節「都市の中の森」では、自作品における大自然ではない都市の中の森を、「不自然な自然」として表現するようになった経緯と、モチーフとしている街路樹や公園について日本と西洋の比較から述べた。また、囲いを通過する空間の他に、包まれる安心を感じさせる場所を描いた作品を例に挙げ、テーマの関連性を示した。

第2節「囲い」では、木立によってできる抜けの形が、鳥居の役割を果たし、通過する空間として二つの要素を持つことを論述した。一つは、通過する空間として内と外を分けるもの、二つには、意識と無意識、現実と非現実を分けるものとしての要素である。前者については、ロマン主義のピアスタッドや、日本画の狩野芳崖の作品に見られる洞窟を例に、光と影、内と外が、平面上でどのように表現されているのかを分析した。後者については、自作品では無意識の世界を内側に、現実としての都市を外側に表わしていることを、述べた。第3節「囲いの森」では、森の形象をスケッチし、そこから重要な線を抜き出すことで抽象化した、中間表現について論述した。

## 第2章「有機の形と色」

第1節「有機」では、前章で論じた境界について、身体性をともなって具象と抽象を行き来する画面を、筆者の制作での発酵熟成とし、岡崎乾二郎の著書『抽象の力』を援用して解説した。また自作品のスケッチを用いて、無意識や記憶から立ち上がる形を幽玄な世界観として表現できる可能性があることを述べた。

第2節「色」では、日本画の古色のような色彩が、西洋の油絵より、自然の色彩を豊かに表現できる可能性について考察した。岩絵具と日本の風景の色との相似性、日本画の色、日本独特の自然に対する色彩感覚について論じた。

第3節「有機の形と色」では、第1・2節で述べた、有機的な形と色を用いた中間表現としての世界観について論述した。具象的な森でもなく、抽象的な形と色でもない作品の、“完成”について言語化した。

## 第3章 提出作品「杜の径」

第1章、2章を踏まえ、森を主題とする自作品と提出作品「杜の径」について解説した。

終章では、本論文のまとめと、現在の課題と展望を述べた。

### (論文審査結果の要旨)

本論文は、都会の中で限られた緑地スペースとしてある公園や並木道、屋敷林などに惹かれる筆者が、自然と人工の交錯領域を表現する試みを論述した創作論である。

7才頃まで海外で多く過ごした筆者にとって、言語の壁からのがれて一人になれる公園や並木道はホッとする場だったらしいが、整然と刈り込まれた街路樹や幾何学的な区画整理には違和感を感じたらしい。親近感を感じたのは、東京でよく見る桜並木や遊歩道など、ゆるやかに曲がりながら両側の樹木がトンネル状になった小径らしい。それが、高速道路の高架下周辺の風景を、あえて支柱を樹木に換えて描いた提出作品につながっている。

第1章「囲いの森」では、まず筆者が魅力を感じる都市の中の森が、幼少時に都内の近所にあった資産家の屋敷林の記憶に発していること。そして西洋と日本の公園や街路樹、道などを比較し、西洋での直線的な道路や垂直の樹木より、樹幹や道がうねり、奥まった先が見通せない日本の並木道が、筆者の描きたい景色であることを確認する。ただ西洋式の日本の公園や、ナチュラルさが計算された大名庭園などには、やはり違和感を感じるらしく、人工と自然の交錯領域をさぐる筆者の基準が、かなり微妙で独特らしい様子がうかがわれる。「幼い頃に海外を転々とし、その度に環境や価値観が変わったことから、変わらない根源的なものを探すようになったからかもしれない」という筆者自身、まだそれを模索中なのだろう。

第2章「有機の形と色」では、筆者が必ず行なうという森や樹木のスケッチを通して、無意識や記憶から立ち上がる形が「有機の形」であること。また日本画の顔料で和紙に描く色の感触は、森の色あいと似ており、日本の自然を描くのに親和的な「有機の色」であるとする。結果として筆者が描く風景は、曇りの黄昏時をイメージした、湿気を含むグレーの「中間表現」が多いことを説明する。

第3章「提出作品「杜の径」」では、筆者のいう都市の中の「囲まれた森」は、実態としては「杜」に近く、大通りではない散策の道は「径」に近いことを確認して、提出作品を説明する。練馬区大泉の高速道路に囲われた杜に取材し、支柱を寿福寺の楠におきかえて描いた本図は、朱・黄・青・緑の4色を重ねた茶色やグレーの色で描かれている。フラ・アンジェリコのフレスコ画の包みこむような色彩を見て以降、筆者は中間色や濁色を用い、現実世界の風景もほとんどが中間色だと知ったことが、現在の「有機の色」につながっていると述べている。

ホンワカとした雰囲気筆者同様、論文もややつかみ所のない印象もあるが、筆者の思考の輪郭を明確化した学位論文として、審査員一同の承認を得た。

#### (作品審査結果の要旨)

申請者は都市の造成林や、街路樹、庭園を「囲いの森」と呼び、それらを「不自然な自然」と位置づけている。本論は、申請者がその、「不自然な自然」に快・不快が曖昧な畏れと魅力を感じ、自身の作品のモチーフとする意味。その根源を探る制作論である。

申請者の定義する、「不自然な自然」といった矛盾をはらむ感覚は、美術大学への進学、特に日本画領域に進んだ自身の経験の中で濃縮されていく。小・中・高校での美術教育、また受験準備における絵画基礎の修練で身につけた西洋的な透視図法や、陰影での立体感を伴った実感と、日本画の持つ平面性を保持した立体表現や婉曲的な実感との狭間で、矛盾した表現、矛盾したモチーフと相対しながら本人の語る「切り捨てる表現」つまり、説明のための表現は切り捨て、感覚的な実感を追い求める制作スタイルに繋がっていった。それでも足りない自身の体験の具現化には、木、草、石、土、水といったモチーフそのままの日本画画材に援護されていたとも語られる。

提出作品「杜の径」は、自身が日ごろ目にしている都市風景を切り取った風景画である。幹線道路に隣接した造成林とのことだが、実際には中央に高速道路のコンクリートの橋脚があり視界を遮っている。巨大なコンクリートと樹々の対比は申請者のいう「不自然な自然」に合致するモチーフと言えるが、下図の推敲を重ねるうちに本画では橋脚は大木へと置換された。唐突に現れた巨木は所在なげにただ大きく、画面に特異性を持たせる役を担うこととなった。画面内では自然物も人工物も一見水彩画のような静的な表現で描かれている。作品の印象は所謂重厚な絵肌ではなく、むしろ絵の具の層は薄く水分の多い流動性のある筆致と言える。曖昧で捉え所がないような、それでいて大きな質量、重力といったものを感じるところが興味深い。

作品題名の通り都市の道と森がモチーフだが、自然讃美でも都市化礼賛でもなく、ただ都市と樹木が共存することを得体の知れない美しさとして表現する意思が伺える。どちらかがどちらかを脅かすこともなく、かといって融和もしない。ただ同一画面上にあって偶然性をあらわにしながらも計算された構成と制御された表現をもって描かれている。それがこの作品の不思議な魅力の要因であると考えられる。

論考ではウォーホル「キャンベルスープの缶」に触れ『大量消費する“人工”への違和感と、洗練されたデザインのギャップによる空虚な美』と評しているが、終章ではその表現の方法論を、申請者が「中間表現」と呼ぶ理知的で緻密な絵画構成と、それと別次元にある曖昧で未完成の美とが融合した、矛盾しながら完結する作品表現を用いて「そのままの姿を描くこと」であると論じている。提出作品では荒削りではあるものの、申請者の語る「中間表現」、「そのままの姿を描くこと」、それらが融合した美意識の端が確かに発揮されていると確認できる。また、制作に於ける日本画技法や、材料研究は非常に高い水準のものであると認められる。

審査会においては、審査員全員が一連の作品を学位にふさわしいものとして評価、判断し合格とした。

#### (総合審査結果の要旨)

申請者が絵画制作のモチーフとして選択する森は、大自然の森ではなく、都市の中に存在する人工物に囲われた「不自然な自然」としての森である。申請者はそれを「囲いの森」と呼ぶ。幼少期、海外を転々として来た申請者は、言語等の問題から一人で過ごすことが多く、中でも森で過ごした時間は申請者に様々な思索を与えてくれた。幼少期の記憶や経験から森への親近感を覚えていた申請者は、当初、身の回りの公園や森、大自然の森、それらを同列にとらえ、多くの風景画を制作してきた。しかし、ある時から都市の中にある人工の森に違和感を覚えるようになり、その「不自然な自然」としての違和感を表現したいと感じるようになり、やがてそれが制作の動機となっていった。

本論文は、森をモチーフとした囲いの空間を、有機的な形と色による抽象と具象の中間表現として描きだそうとしている申請者の制作論を論述したものである。申請者の幼少期の記憶や経験をもとに「不自然

な自然」の違和感がどこから来るのかを探っていくとともに、日本と西洋の庭や公園などを比較検証しながら論述していく。ドローイングして得た複雑な形象を画面上で再構成し、実感を追い求めながら抽象と具象の間を行き来する現在の制作スタイルに繋がっていった経緯を述べる。動機としての論拠がややあまい気がするが、岩絵の具等の日本画材と申請者の現在の表現方法との親和性について述べるあたりは申請者の独自の視点を感じられ、興味深い。

提出作品「杜の道」は、高速道路の高架下に何十メートルにもわたって木々が人工的に植えられた風景を取材したものである。付近に住む申請者にとって見慣れた風景ではあるが、申請者はその風景の人工性に、ウォーホルのキャンベル缶の絵のような空虚な美しさを感じたという。作品の印象は一見すると普通の風景画のようにも見える。しかし、絵の具を塗ってはそれを洗い流すという作業を何度も繰り返し複雑な色味を作り出し、抑えた表現とも相まって申請者の作品に一貫する不思議な魅力溢れる作品となっている。粗削りには見えるが、絵としての形や色へのこだわりと描写の取捨選択は、申請者が目指す「中間表現」を体現するものだとすると納得がいく。申請者の描かんとする美意識が垣間見える質の高いものになった。また、日本画の技法や材料研究も高い水準のものと認められる。

以上の点から、審査会においては審査員全員の評価と承認を得、学位にふさわしい作品であると判断し合格とした。